

舘 奈保子さん

【眼科医】

真生会富山病院(射水市)の看板眼科医、舘奈保子さんは患者やスタッフに絶大な信頼を誇る。気さくでユーモアたっぷり、そして情熱家な印象を受ける。彼女の元には全国から糖尿病網膜症や緑内障といった難しい眼病に悩む人が訪れ、待合室は連日満員。2時間待ちということも珍しくない。「一日一日を命の限り生きたい」。日々、患者一人一人とまっすぐに向き合う。

目の前の壁が私の原動力。
高いほどファイトが湧く

Naoko Tachi



—京大文学部から医学を志したきっかけは。

親は地元の国立大学に進んで教師になることを望んでいました。京大を受験したのは「親の束縛から逃れるには県外の大学に行くしかない」という不純な動機からです(笑)。文学部で仏教と親鸞聖人の教えに出会い、人生が180度変わりました。それは「いつか必ず死ぬ人間が、生まれて本当に良かったと思うように生かされる」というもの。それまでは「どんな道を生きたってどうせ人は死ぬのだ」と考え、毎日に行き詰まりを感じていたんです。親鸞聖人の言葉に出会った時に「人間に生まれて良かったと思えるような生き方をしたい。命をかけてやれる仕事をしたい」と思った。それが医者の仕事でした。

—進路変更は大きな決断ではなかったか。

もともと目指す山が高ければ高いほどファイトが湧くタイプ。大学を休学して1年間予備校に通い、医学部を再受験しました。遠ざかっていた数学や物理、化学も勉強し直しました。ひとくちに医者と言っても、細胞や遺伝子などを扱う研究医

と、人と向き合い病気を治す臨床医がある。臨床医は人が何に苦しんでいるのかを聞くことから始まるので、数学よりも文学に近い仕事であると教わりました。それまでの経験は決して無駄ではなかったわけです。

父が子どもの時にけがで片目を失明していたことも眼科医になった大きな理由かもしれません。今なら私が手術して視力を取り戻せたレベルのけががもしないですが、当時の医療では眼球を摘出するしかすべはなかった。片目が見えない不自由さを父から聞かされていたので、苦しんでいる人の役に立ちたいと思いました。

研修医時代は京大眼科学教室の網膜手術のエキスパートである先生の下で学びました。その後、滋賀県の病院に赴任し、診察やけがの治療まで全て一人でこなさなくてはならなくなり、この厳しい経験がその後の大きなステップとなりました。

—専門分野について

網膜、とりわけ「黄斑」の手術です。目の網膜には光を敏感



オペを行う舘さん

に感知する黄斑と呼ばれる部分があり、ここが壊れると視力が大きく損なわれます。黄斑が悪くなる病気として糖尿病網膜症や網膜静脈分枝閉塞症、ぶどう膜炎などがあります。見えにくくなると白内障とばかり思っていたけれど、実は黄斑の病気だったりすることもあるので、眼科で詳しい検査を受けることをお勧めします。

糖尿病になって目に症状が出るまでは何年もかかります。糖尿病と診断されたら目の検診も受けましょう。富山の方は県民性なのか、症状が悪化するまで我慢してしまう方が多い

—これからの夢について。

現在、世界で最も糖尿病網膜症で苦しんでいるのは中国の人たちです。現地に赴いたり、こちらにお呼びしたりして、中国の方と交流しながら糖尿病網膜症の治療を進めていけたらと思います。そして一日一日を大切に生きていきたい。今日死ぬとなった時に「今やっているのは本当にすべきことなのか」を自問しながら。医者として、一人の人間として「やっぱり生まれてきて良かった」と思える人生を送りたいと思っています。

んですよ。糖尿病網膜症や緑内障は検診で防ぐことができる病気。当院では最新型のカメラとOCT(光干渉断層計)を備えており早期発見、早期治療を目指しています。

—壁にぶち当たったことは。

毎日ですよ(笑)。医療が日進月歩で進み、iPS細胞などの再生医療の研究も行われていますが、世の中は治らない病気も多くあります。手術が成功して達成感を感じる一方で、「もっと早く来てくれたら、もっと良くてあげられたのに」という挫折感、無力感も感じます。だからこそ「生きているうちは力を尽くそう」と思うのです。目の前の壁は、私の原動力でもあります。



射水市内の公民館に招かれ、予防医学などについて講演。会場に人が入りきれないほどの盛況だったという



たち・なおこ 広島県出身。京都大学文学部中退、神戸大学医学部卒業。京大眼科学教室で研修後、愛知医科大学眼科助教。平成8年に真生会富山病院に赴任、現在同病院アイセナ一長。専門分野は網膜硝子体手術、網膜疾患(網膜剥離、糖尿病網膜症、黄斑疾患)、緑内障の治療。趣味は音楽鑑賞と読書。沢田研二のコンサートに出かけるのが楽しみ。射水市在住。